

特別連載

佐伯と国木田独歩 (四)

賛助会員 山内武麒

(佐伯市山手区)

(承前)

女島の山を見て愛らしさを感ずる。この山は鬱蒼と樹木が繁っている。日置氏から、この山は媽が沢山集るので、遊獵者のチヤームになつていと聞いていたので、益々愛らしく思つた。

この山の森は、沖嶼が森という名が付けられている。佐藤蔵太郎氏の『佐伯志』に「沖嶼が森」と題して、次のような文がある。

女島村の北角、中江と対する処は、小山の峰のあり、土人呼んで沖嶼が森と云ふ。森樹鬱蒼として、頂上に鎮坐せる一神社あり。之と沖嶼明神と称ふ、其丘麓は深淵にして深きこと測る可からず。伝へ云ふ此淵には昔巨大の亀棲みて、偶ま水面に浮ぶときは、首の大き給んど馬に等しかりしが、一歳土佐より龜捕来伯し、夜中笛を鳴らして件の龜を浮かせ、遂に生捕りて帰れりと云ふ。

この山の麓に小さい村がある。ほんの十四五軒ばかりの小さい村だ。この村にも私は愛らしさを感ずる。ここにも創作の種に値するものがありそうで、どんな人が住み、どんな物語があるか。この村の歴史は面白いだ

らう。さかつて見たいと思ふ。

女島の行き帰りの道にある魚市場、これにも物語の種がありそう。集つて来る漁夫、老翁、少女、若者らには皆それだけの物語をまつてゐることであらう。この魚市場で、たけりかのしる男を見た。多分大声で叫ぶせり男であらう。この男は何か物語があるであらう。

魚市場は女島にあつた魚市場で、のち野菜市場になつてゐる。昔は上浦の漁師と中浦の漁師と、朝早くこの岸辺に船を乗りつけ、獲つた魚を市にかけていた。昔女島に行くには、女島に行つてこの魚市場の前を通つて川岸に出て、岸の道伝いに女島川の渡しに行き、渡し舟で女島側に着き、また川沿いの土堤を歩いて女島へ行つた。

この日の午後、独歩は警署館の宴会に招かれて出席した。警署館は旧藩主毛利元就の邸宅である。今の池考である。殿様の招待であるから、集まつた人は、たゞたる佐伯の有志の面々であつたに間違いない。五六十名の中で、独歩は一番年若であつたであらう。

また夜は一人で散歩に出て、さびしい山際の士族屋敷と霞さう、暗い古市町を通つて船頭町に行く。途中で長田氏と遇つてゐる。町を通つて何とさびしい町と思ひ、ウオーズウオースが村落を詠んだ詩を思ひ出した。さびしい町と思つても、そこに住む人にはそれぞれの生活がある。人それぞれの色々の悩みがある。うす暗い燈が障子にうつる家があり、戸をしめ切つて静かな家があり、軒がやぶれて傾いた家があり、笑い声のなる家があり、皆さまざま生活がある。かじゆ、おけや、乞食、子供等。理髪所、井戸、みなそれそれに物語がありそう。この自然の中は起る様々な

事実をよく見ることだ。そこには必ず深い意味を持った物語を見ることが出来る。

私の天賦は、世の人々が、深い注意と感情をもって、この自然と人生を見て行くために尽す処にある。そのためにほよい作品を書き残さなければならぬと思ふ。

四日の記 うらしる峠の美しい山々麓の平野から、白い煙の立ちのぼるのが見える。木立の平野からわらわら焼く煙である。今は刈り入れの最中だから。この白い煙も創作の材料になりそうだ。この火を焚く農父の一生を思い、その運命を想像し、同情の念が湧く。この白煙の中にも人生を感じたのである。

独歩が寓居した坂本邸の二階からの見情しはとてまよい。灘山、木立の山、元越山からの堅田の龍王山と、ずつと一望の中に見渡すことが出来た。今は前に大きな家が建ち並んで見難くなつてしまつた。

この室から見たもの、聞いたものを書いて文章に極きを加えてあるのが、独歩が書いた小品「土曜日の夜」である。この作品は坂本邸のこの室で書いたことになつてゐる。これは明治二十七年十月発行の「家庭雑誌」に載つた。室から見た風物を表現した箇所と拾つて見よう。

「立つて障子を開き、欄干に倚りて見たすら暮れゆく寂しき風物に眺め入りぬ。遙かに聳ゆるものは元越山なり。元越山の彼方は太平洋に連なる日向灘なり。木立山右にあり。灘山左に横たわる。所々にデルタをつくりつつ流れゆく番匠川。雨をふくめる漁村の柳も文人の造句にあらず。絲の如く降りそそぐ雨に、薄青き煙をこめて、重く小市街の霞ふものは何ぞ。」  
「帯に清正公、信徒が打つ太鼓の音、雨にしめりて重く響き来り。名を知らぬ小鳥。門前の柳の頂に上りきて、雨と夕暮とを姦しげに声を立てて転り。二羽の、

これこそが知らぬ鳥。もつるる如くに並びて。上下に飛びて山の端はかくれ去り。暫時して柳なる鳥も何れにか去り。太鼓の音のみぞ愈々重くは響きける。市街寂々として人なきが如し。水田は鳴く蛙遠く又た近し。」

「頭を拳ぐれば、夜陰己に全く市街、山岳、田野、川流を包んで、雨のみぞ愈々降りそそぐ。水田の水薄く光りぬ。耳をそばたてて聴けば雨の音にまじりて、老松おひ繁る馬場の彼方より。遠瀬の如き響かすかに聞へ。更らに耳を澄ませば何処よりか小児の泣き声聞へつ絶へつ。提燈の光一個。欄干のうちは現はれて小路を横ぎり忽ち又た欄のうちにかくれぬ。」  
独歩は午後登校して授業として午後四時に帰宅し、白牛へ散歩に出た。丁度秋の収穫の真最中で、皆んな挙つて野ら仕事に大奮である。働いている様子を記してある。

六日

見よ。またも彼の山の煙をちり返るなり。朝霧をへだてて、彼の山の麓に双なる其うち、白銀色に煙をちり返るなり。彼の山は昨日遊びし山なり。

今日の日も終はりに十二時を打ちぬ。今日一日は校務に追はれて過ぎ行きぬ。華暮山名驥氏米路、カーライル英雄論、十九世紀大勢、カーライル伝を貸す。感話す、氏亦を感じたるが如し。  
昨日の事を記さん。  
昨日登りたる山は俗に十二段と称する由を本日、飯沼氏より聞く。

吾意よりの眺めの餘りの美しさに堪へ兼ね、昨日遂に此山に登りぬ。八背過ぎ弟と共に家を出づ。無類の好天気なり。船頭所の川岸より川船に乗りて木立という村の川岸に着す。此間水上一望を少しく越ゆ。同船者は余と弟とを除きて七人、中、女三人。彼等の談話及我が百の新なりき。凡て此人々の談話日耳に新なり。船頭は老いたれど逞ましげなる男なり。種々の如かに河流を渡る心地の面白き。吾らにほじめての事也。兩岸の紅葉、岸頭の茅屋、之れとがこままがき。其傍に立つ田舎娘、青びかる刈、きびあるげのうづ、皆吾が目にもめづらしからぬはなし。此の河船もたしかに吾物語の料なりと思ふ。之れによりて往復する田舎の民、其婦、其姪、其小女、いちいちたださは悉く相態の美しき物語をもたぬはなかるまじと思はる。同情に堪へぬは此等の生涯なり。浦代峠の絶頂に登り、茲にて茶屋の婦人に十二段の絶頂に達す可き道を問ふ。彼女云ふ。これよりは道らしき道あるなし。嘗て自ら試みたれど、餘りには難なりしためひき回へしぬと。吾等元來剛情者なるが故に其道によりて進む、果して其難路名状す可からず。荆棘の爲めに閉ぢられて進退窮することしばしば。たまたま小さきひづめの跡を見出しぬ。これ野猪のにおらずば鹿の足跡なり。吾等ぞぞる。遂に一條の道に出づ。これに力を得て山嶺を目がけて登る。松の老株の下に石地蔵あり。其傍に一先撫いこふ。彼れ親切に道を教へぬ。マイケルを想ひ出して又た此老翁と思ふ也。

山嶺に達したる時四圍の光景餘りに美に、餘りに大に、餘りに全きが爲め、感激して涙下らんとしぬ。只だ名状し難き鼓動の心底に激するを見る也。

太平洋は東にひらき、北に四圍也、手にとる如く近く現はれ、西及び南は只だ見る山の背に山起り、山の頂に山立ち波の如く、潮の如く其壯觀無類なり。最後の煙山遂に天外の雲に入るが如きに至りては入さして一種のメランコリーの情おらしむ。又た遂に開防の岬嶼、多分夜嶋らしき者を眺め得たり。雲の美ゆ、空の美ゆ、海の美ゆ、ア、此地球上の美は己に全き也。

此山の絶頂に「一等三角點」あり。此に登りて坐して此絶景を眺め得たり。大なる自然に對する毎に自然は吾に近く在り。吾は自然に打たれる也。自然の大と見る毎に人生の不可思議、靈妙と感ず。人類の歴史は幻の如く吾が前に、其最初第一の原始人より最後第一黄金時代の子との間の人類の歴史の縮図精神を示すなり。生死の窮りなき海は眼下に横はるを見よ。

これれは歩兎等々、元越山への登山記である。寓居坂本邸の二階の自分達の室から、いつも眺めてその美しさを觀賞していた元越山へ、どうしても登りたくなり、今日こそ登つたのである。

五日の朝八時弟收二と家を出た。その日は天晴れ空は拭つたような青空であった。船頭町の川岸から木立のおろし舟に乗った。この舟の中で、様々な客と相乗りして、彼等の語る話に興味を覚えた。兩岸の秋景を眺めながら舟はゆるやかに流を渡る心地よき、吾らは初めてのことであると感じ、この川舟の情景は物語の材料になると思う。一、水のページ地岡参照

木立の川岸で舟を下り、浦代道を登つて浦代峠に着いた。そこで茶屋の婦人に元越山の頂上へ登る道を問くと、ここには道らしい道はなく、わしく登れない。坂を下

りて木立からならよい道があると聞いた。しかし二人はまた坂を下るよりと登りにかかる。中々けわしい。其難路名状すべからずと記してある。いばらにはばまれて行きも滞りも出来ない。二人は極飯を頼んでまた登ったという。途中で猪か鹿の爪づめの跡を踏見しておそろしくなる。独歩はナイフを取り出して登ったということだ。漸く頂上に通ずる道に出て、頂上はたどり着いた。

頂上の眺めは絶景であった。その余りにも美しく、その余りにも大きいのに、只だ驚くばかりで全く感嘆してしまつて、涙を流しそうになつた。と記してある。漠々と広い太平洋、望予海峡を隔てて手に取るように見える四国地、西、南日山また山、重畳する峰、その大なる眺望には強く心を打たれた。遂に肩防の馬らしきものを発見して、父母の住む故郷を思ひでいる。独歩はこんな大変美しい自然に接することが出来て、心が満ち足りたことである。

この記は、独歩の「元越山に登る記」という紀行文に、くわしく書かれてある。この文は未発表の遺稿として残っている。

七日

(前巻)

十二段より帰路、又河船に乗る。船頭只だ吾等二人の爲めに船を行く。此船頭は先きの船頭とは別人なり。それと等しく老人なり。夕陽已に斜に秋の晴天を照らすに当り、船少るやかに河流をわたる。船頭嘗て長河に在りて、累船も造りたる事ありと自ら語る。其述懐は人をして人生の経過を思はしむ。此老人を忘るる能はず。何とぞ彼を一個のソールとして天地間に於ける人間の子とせむなり。

元越山登山沿道略図



此老翁の一生と雖も、必ず深き物語あること必せり。彼何故に船工となりしか。彼の小児の時代は如何なりしぞ。彼の親は如何、彼長崎に在る時は如何なりしぞ。彼何故に帰国せしぞ。而して今は一瀬の小舟をこぎて人をわたり、以て其生涯を一つづつねたならぬに至りたる乎。彼に妻あらざる乎。彼は小児あらぬ乎。今あるか、なき乎。彼一生の悲喜哀感は如何。若し此の如く想像し来れば此一個の翁と雖も必ず大なる物語ある可し。嗚呼此老人が一生は如何なるる生命なるぞ。

回想すれば一昨日の遠行は一個の許なり。美なる哉、自然而して其間に多くの此自然と調和する人間を見たり。老樵夫、老船頭、多くの農夫、皆な美しき配合を吾が想像の裡に形づくも也。

昨日の記の続きである。帰途に又木立おろしに歩いた。今度は独歩連二人だけであった。船頭は来る時の船頭とは別人であるが、やはり老人だった。舟の中でこの老船頭の身の上話を聞いたのである。この船頭

以前は船大工で、若い頃は長崎で大きな黒船を造っていたと云う。その人が今は年老いて、おもしろい船頭をしてその日その日を送っている。独歩はこゝ老人の身の上の思いを寄せ、同情して色々想像している。そしてこの老翁の一生は物語を生み出すものになると思つて、回想すると、一昨日の元越の十二段登りは一つの詩であつた。美しい自然とそれに調和する人間を見た。この美しい配合は、自分の胸の中に色々想像を生じさせて満足したうれしさを記してある。

八月

秋雲、十二段の峰をかすめて四面の風物暗憐たる色ありけり。雨終に降り米りぬ。されど今已に止みて天何時の間にか晴れ、満空の星彩いとほおきらかなり。

本日は水曜日也。祈禱会に出づ。校務に従ふは常の如し。

吾が此頃の境遇は決して幸福なりと言ふ可からず。併し、羨むる自然に接し、目新らしき生活を見て大に得る延あるに相違なけれども。校務の爲めに専ら文書者としての天職の爲めに、十分勉勵用意するのひま少なき事は吾に取りて尤も不幸と言はざる可からず。心はあせれども暇なきを如何せん。されどこの不幸らしく見ゆる者も神は必ず吾が爲に結極・幸なる事ならしめ給ふと信ずるが故に、只だ吾は努む丈けを尋むるの外あらじ。

秋雲が立ちこめて雨が降り出したが、夜には入って雨は精化、今は満天に星が輝いている。自分の境遇を省みて、今の自分は決して幸福ではない。美しい佐伯の自然に接し、目新しい人々の生活を見て、大いに得るところ

があり、詩表(じぎょう)を肥也しているが、校務に追われ、自分の天職と決めてある文書者としての勉強が出来ないからである。心はあせるが暇がなくてどうしようもない。しかし、神はきつと救ってくれるに違いない。今の自分は教師として務めるだけ務める覚悟であると心に期している。

研究

「今宮さま」の木像について  
 (青山・黒沢の富尾神社の撰社)

会員 佐 脇 賢 一

去る三月二十五日、佐伯史談会日佐伯歩会と共催で、黒沢・東光庵の觀櫻をかねて、青山地区の史跡めぐりに行なつた。私も久しぶりの黒沢行きとて、喜んでお供をさせてもらった。

さて、一行は黒沢に着くと、まず富尾神社に参拝したが、私はここで一つの大きな収穫をした。それは御本殿の向つて右側にある境内撰社「今宮さま」についてであるが、この富尾神社には、これまで度々参拝してはいるが、撰社「今宮さま」の木像については考察することがなかつた。

この日、同行した矢田清氏ととも「今宮さま」の木像を観察したが、矢田氏は木像の型状、彩色・塗料などから、この製作室代寺室時代と推定された。素朴といふか、稚拙といふか、どう見ても専門仏師の作ではないが、古色蒼然たるものがある。

木像の神像か、仏像か定かでないが、「今宮さま」と